

南方熊楠が遺した地下生菌図譜に描かれた種の実体

折原貴道* (神奈川県博)

明治～昭和初期にかけて活躍し、傑出した民俗学者・博物学者として知られる南方熊楠 (1867-1941) が、欧米遊学の帰国後から死の直前までの 30 年以上にわたり、多様な菌類のユニークな図譜を残したことは広く知られている。彼の残した菌類図譜は、およそ 3,500 点にも及ぶとされており、それらの図中には、彩色画だけでなく、標本の特徴の仔細な記載や、一部については標本そのものも貼り付けられている。後年、小林義雄博士により編纂された、『南方熊楠菌誌 第 1 巻』(1987) には、熊楠の記録した複数の地下生菌図譜中の記載文が転載されている。それらのうち原図が掲載されているものは、熊楠により “*Octaviania atrovirens* Minakata” の名 (非合法名) が付けられた菌のみであり、小林博士による種同定に関しても、同定の根拠が明記されておらず、再検討の余地が多い。また、小林博士により種名の検討がなされた当時と比べて、国内の地下生菌に関する知見は近年飛躍的に増加しており、それらの知見に基づき、熊楠の地下生菌資料を再評価する意義は大きい。そこで演者は、近年新たに発見された熊楠の菌類図譜『第二集』中の資料を含む、計 8 点の地下生菌図譜について、図譜に添付されている子実体標本の観察を行うことで、新たに種同定を試みた。

その結果、供試した 8 点の図譜のうち 6 点は、過去の同定とは異なる種であることが判明した。上述の “*O. atrovirens*” は後年 *O. asterosperma* Vittad. と訂正されている。この図譜に添付された標本は未熟であったため担子胞子は確認できなかったが、強い青変性を有することや子実層の形態などの特徴から、2011 年に記載されたツチダマタケ属 *Rossbeevera* T. Lebel & Orihara の一種であると考えられた。その他、同様に *O. asterosperma* と同定されていた菌は、顕微鏡的特徴から、2016 年に新種記載された *Rossbeevera paracyanea* Orihara であると考えられた。本標本は 1907 年に採集されたもので、アジアにおける本属菌の記録としては最も初期のものとなる。熊楠により “*Hysterangium kashiyamanum* Minakata” の暫定名が与えられていた菌は小林博士によりマメツブタケ *Hymenogaster arenarius* Tul. & C. Tul. と同定されたが、形態的特徴からショウロ属の一種 *Rhizopogon* sp. であると考えられた。その他、「ショウロ」と同定されていた菌の一部は何らかの菌の菌核であった。

熊楠の菌類図譜中の標本を、顕微鏡的特徴に基づき検討を加えた例は、過去に殆ど例を見ない。本研究例のように、十分な知識背景のもとで、適切な手法で観察を行うことで、熊楠の残した図譜の科学的価値を評価する試みを、今後も継続してゆくべきと考える。